



Title	田川弘雄・池上日出夫両教授のご退官にあたって
Author(s)	松田, 武
Citation	大阪外大英米研究. 1999, 23, p. 11-13
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99215
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

田川弘雄・池上日出夫両教授のご退官にあたって

松 田 武

長きにわたって大阪外国語大学アメリカ講座の大黒柱的な存在であられた田川弘雄・池上日出夫両先生は、平成11年3月31日をもってご退官の記念すべき日を迎えられる。両先生にお別れを申し上げるにあたり、私たち執筆者一同は、大阪外国語大学における両先生の長くかつ深い学恩とご指導ご鞭撻に対して感謝と敬意を表すため、ここにささやかではあるが、『大阪外大英米研究』第23号をご退官記念特集号として両先生に捧げるしだいである。

田川弘雄先生は、昭和42年4月に大阪外国語大学に奉職された。それ以来、先生は、ユージン・オーニールなどの劇作家の作品を中心とする、30余年におよぶ研究および教育生活を通じて、日本におけるアメリカ演劇研究の代表的な研究者の一人として数多くのすばらしい業績を残され、アメリカ演劇研究の発展に貢献された。その業績としては、たとえば、アメリカ演劇の研究書として高い評価を受けている『アメリカ演劇の世界』（研究社出版、1990年）などがそれである。先生はまた、筆者も一委員としてお手伝いさせていただいたことのある日米文科系学術委員会（日米友好基金の資金的援助による大阪大学・神戸大学・大阪外国語大学の共同研究機関）や京都アメリカ研究夏期セミナーなどにおいて、中心的なオーガナイザーならびに報告者として大阪外国語大学の存在を強くアピールされ、大いに活躍された。大阪外国語大学の教官として必須条件であるすぐれた語学力と独特のユーモアとウィットに富んだお話しぶりでもって学生を優しくまたきめ細かく指導され、教育者としても大阪外国語大学の英語教育に大いに貢献された。さらに先生

は、平成2年10月から平成4年10月まで大阪外国語大学の要職である学生部長を務められた。その任期中に先生は大学の組織改革およびカリキュラム改革に取り組み、大阪外国語大学の歴史に重要でかつ輝かしい足跡を残された。

一方、池上日出夫先生は、昭和45年10月に大阪外国語大学に奉職された。それ以来、ほぼ30年間、先生はアメリカ黒人作家の作品やマーク・トウェインの作品などを中心にアメリカ文学の研究に取り組み、数々のすばらしい力作を世に出された。たとえば、アメリカ黒人の解放運動と黒人文学の歴史的展開を跡付けされた『アメリカ黒人の解放と文学』（新日本出版社、1979年）や日本図書館協会選定図書に選定され高い評価を受けている『アメリカ文学の源流—マーク・トウェイン』（新日本出版社、1994年）、さらにはこれまで発表された約100編の文学批評のなかから25編を厳選され一冊の著書として出版された『独立宣言・奴隷解放宣言とアメリカ文化・文学に見る—』（青磁書房、1998年）などがそれである。先生は、文学研究および文学批評において、その文学作品がなぜ書かれたのかといった問いかけをすること、それに文学作品をそれが書かれた歴史の脈絡の中に正しく位置づけることの重要性を強調されるとともに、自らそれを実践されてきた。先生は、アメリカ文学の研究をすすめられる際に、つねに隣接学問の成果、とくに歴史学に目を配り、それを批判的に摂取され、アメリカ文学研究における指導的研究者の一人としての地位を築かれた。そのことは、たとえば、先生が日本学術振興会特別研究員等審査会の専門委員（英語・英米文学、文学一般）としてご活躍されているということが雄弁に物語っている。また、教室ないし研究室でのアメリカ文学および英語の授業において先生は、学生を丁寧に教育・指導され、良心的な教師として学生の評価が高かった。先生は、大阪外国語大学の主任を務められ、長年の課題であった英語学科1部・2部の合体を見事に実現された。

以上田川・池上両先生は、私たち後学の者にとって文字通り「導きの星」の

ような存在であり、このたび両先生が大阪外国語大学を去っていかれることは大学および私たちにとって大きな損失であるとともに、さみしい限りである。いつまでも両先生がご健康であることを心からお祈りするしだいである。そして、このご退官記念特集号に掲載された論文から、両先生に対する私たち後輩のささやかな感謝の意を汲んでいただければ、一同にとっても望外の喜びである。

平成11年3月